
行 - g y o

志賀靱丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行 g y o

【Nコード】

N 2 7 2 6 V

【作者名】

志賀鞆丸

【あらすじ】

帝国と呼ばれる国、その中で繰り広げられる二つの派閥争い。

その中でどちらにも付かず、どちらの依頼も受ける『行』という忍者の集団があった。

暗殺、拷問、戦闘を好み血を求める。そんな血に飢えた人間ばかりが集まる行の忍者達の、行という組織の目的は何か。辿り着く先は何があるのか。爽やかに単調に残酷に繰り広げられる世界。

辻斬り（前書き）

流血表現や拷問、死体が解体されたりぐちゃぐちゃになったりします。

救われないストーリーが多いです。

そういった表現が苦手な方は見られない事をお勧めします。

辻斬り

闇夜に影。

人であり人で居られない。死臭を身に纏い、命を奪う死神の様に。暗闇を飛び回る蝙蝠の様に。存在する。

人間の深い欲求に素直に従い、血を求め生を求め愛を求め、気儘に命を弄ぶ。

いつか自身の求めるモノを掴むために。

……血の、匂い。

闇夜に漂う微かな匂いに、花青^{かせい}は足を止めた。

止めたと言っても、此処は地面の上ではない。

街の家々の屋根の上を駆けている所だった。

急いでいる訳ではない。ただ、街の中に長く居る事をあまり好いていないのだ。

……まさか、隊長が。

一瞬、頭をよぎったのは、先ほどまで共に仕事をしていた隊長の安否だ。

部下に後片付けを押し付けると、さっさと帰っていったのだ。

自分達には敵が多い、いつ襲われても仕方がない…が、あの隊長の事だ、それは無いと知っている。

だが、何ともつまらない仕事だったので、何か面白い光景が見れるならと、花青はゆっくり血の匂う方へと、進むことにしたのだ。

万が一も無いが、隊長が怪我でもしたら面白い、と。

隊長はいつも死体をズタズタにするから、後始末を頼まれる自分達はいつも手がかかるのだ。

……もう、片付けは勘弁だな。

先ほど出来あがっていた死体を思い浮かべる。

気を配りながら暗闇を進む。風は、感じられない。

二つ程、屋敷の上を通り過ぎると匂いが強くなってきた。

月は雲に隠れ、光なども何もない暗闇である。

だが、花青の視界には何の問題もない。闇は自分自身だ。

更にひとつ、屋敷を過ぎると家々の間にある小さな道へ出る。

どこにでもあるその小道だが、匂いはその辺りからの様だ。

花青は屋根から軽く飛び、人の気配がする近くの塀の上へ音もなく降り立った。

小道を見下ろすと、血痕が続いている。

それを目で辿ると一人、立っていた。足元には死体らしきものが転がっている。

死体も立っている人間も、隊長ではないな……

確認し、興味も失せた花青が立ち去ろうかと思った時だった。

「ん？」

人が、こちらを振り返ったのだ。

雲が、流れる。一瞬、月が現れ、振り返った人間の顔を照らし、その手に持っている太刀がぬらりと赤く光っていた。

……女。

すぐに雲が光を遮る。それと同時に、女は駆け去ってしまった。足音は、しなかった。

照らされ見えた顔は女だった。

女は気配に気づき振り返った様だが、自分の気配を感じた訳ではないし、まして自分の姿も認識出来ていないはずだ。

ただ、先ほどの気配には心当たりがありすぎた。

「隊長、何してんっすか」

花青は、腰に手を充てると、ため息交じりに呟いた。

「暇潰しって所かなあ」

声と共に、花青の隣に人が降り立つ。

「しかも最後、わざと見つかる様にしたでしょ？」

そう、最後に女が振り返った理由は、この隊長が気配を滲ませたからだった。

「お前に顔、見せとこっかなーって」

「なんでまた」

花青は隣に視線を送る。

「最近、ここらで辻斬りがーって知ってんだろ？」

「あれが？」

「今までと切り口は同じだね。」

「だからって、俺に見せる意味あるんっすか？」

花青は、面倒事を押し付けるのはやめて欲しいと、口には出さず目で語ったが、無視された。

「俺らと同じ匂いがする」

同じ、狂った匂い。この隊長はそう言いたいのだろう。

「そう、かもしれませんね」

また、月が現れると、楽しそうな表情の隊長の顔を照らして、すぐまた隠れた。

毒

「って事があつたんだ」

楽しそくに声を弾ませる男が一人、先ほどの光景を語っているのは自分の隊長である春だった。

「隊長、最初から見てたんつか。」

話を聴いていると、女が男と出会う所から見ていた様だった。そんな暇あるなら報告くらいして欲しい。

あの後、報告の為に師の所へ来ていたのだったが、仕事の報告もせずに、春は先ほどの出来ごとを語っている。

今は、各隊の隊長が数人だが集まっていたのを見つけたので、そこで話をしていた。

行には五つの隊がある。ちなみに春は聳孤隊の隊長だ。

「それにしても、その辻斬りちゃんに逢うなんて羨ましい事ですいいですねえ。と言いながら酒を飲んでるのは索冥隊隊長の拷だ。」

「確か、今までに三件起こってる辻斬りだな。」
麒麟隊隊長である、薄が言った。

「で、今度はどこが無くなつてた？」

すると、炎駒隊隊長の俣が会話に加わって来た。

俣は少し離れた所で、何かの調査をしている。良い香が漂ってきた。

「ん？良い香ですね。香ですか？」

その香に反応して拷が口を開く。

「仕事で使うのか？」

薄が言った。

「紅火がね。ってそれより春、どこが無くなつてたんだよー」

そんな事より、という風に惣は春に問いかける。

惣がこう聞くのには理由があった。

今までに起きている辻斬りの死体は、どこか一部が切り離されていたのだった。

「あー左足だったね」

春は薄の前に置いてあった団子をひょいと手に取った。

それを見た薄は、残りの団子が乗る皿ごと春へ渡している。

「一番目は、確か右腕でしたね」

拷が楽しそうに言っている。

「二番目が、右足」

薄がぼつりと言った。

「んで、三番目が左腕ってね」

そう言っていると春は、持っていた団子を口に放った。

「あ、これ旨いねえ」

「ああ、あの人特製の毒入り団子だ」

薄がさらりと言っていると、春は目を見開き固まる。

「・・・マジかよ」

「馬鹿ですねえ」

「お、馬鹿が食ったな！どうなるか楽しみだ」

惣は興味深く見つめている。

「春隊長、死ぬ前に師に報告はして下さいよ」

「ちっ、惣・・・解毒を渡せ」

「俺もってない。報告する時にでも貰ったら？」

「というか貴方、まだ報告してなかったのですか？」

「あ？忘れてた」

「春隊長。良い機会っすよ、報告行きましようよ」

「えー花青、お前行ってきてよ。春が居なくなったら毒がどうなるか見れないじゃん」

「それなら、先に教えて欲しい事があるのですが、いいですか？」

もう、俺が行く事は決定のようだ。

「何です？」

「その辻斬りちゃんは、美人でしたか♪」

「そうですねえ、結構・・・綺麗な顔してた気がしますよ」

「ほう」

「つてかそれ、春隊長にでも聴けるじゃないっすか」

「春は女に興味ないでしょう？だから貴方に聴いたんですよ♪」

「俺は女に興味がないって訳じゃねえ」

「でも生きてる女には興味ないだろう」

「まあ、そうだけだよ」

薄と春が話しているのを横目でみながら返事をかえす。

「拷隊長の好みは分かりませんが、俺から見たら…美人でしたねえ。アレは」

花青は一瞬の光景を思い出した。月夜に照らされた顔は確かに綺麗だった。

「フフフ♪お逢いするのが楽しみです」

それでは、といって花青は出て行った。

「まるでそのうち逢う様な言い方だな」
薄が言った。

「この前、その辻斬りについての依頼が来たみたいですが、師は断ったそうです」

「相変わらず、師もモノ好きだな」

師

花青は、師に報告をしていた。

目の前に座っているのが、師だ。ゆらりと煙管の煙を楽しんでいる。

いつもの事だが、聞いているのかいないのか、分からない様な態度だ。

「そうか、御苦労」

師はそう言って花青に何かを渡した。

「これは・・・？」

朱色の小さな箱だ。

「解毒だ。誰が飲んだ？」

「ああ、春隊長ですよ」

師はどんな事が起こるか予測済みだったようだ。相変わらずどうでもいい事も知っている。

「アイツも今だに引つ掛かるなあ」

くつくつと楽しそうに笑う。

こうやって話しているととてもじゃないが、行の頭領には見えな
い。

自由奔放で、気まぐれで、子供の様な無邪気さを見せる人だ。残酷さも子供の様だが。

「いつまでたっても可愛い所がありますね」

「・・・お前は春とは別の隊長になって貰いたかったんだがなあ」

確かに昔、そんな事を言われた気がする。

「それは向いてないっすよ」

自分に人を纏める事は向いていないと分かっていたし、春の下に付きたいと思っていたからだ。

「春可愛さに、ってわけじゃないのがお前らしいな」

そう、自分は春が小さい頃から知っているしよく相手もしていたが春の下に付き、一緒に行動しているのは親心という訳ではないのだ。

「そうっすかね。じゃそろそろ俺隊長の観察も終わってるだろうし、失礼しますよ」

「おう。あ、その辻斬りは殺すなよ」

「・・・伝えときますよ」

花青は師の部屋を後にし、先ほどの部屋に戻る途中だ。近づく程に、血の匂いが濃くなってきた。

「失礼しますよ。」

花青は一言声を掛け部屋へ入ると、そこには大量の血の海の中に春がもがいていた。

「うぐっ、がっはっ・・・」

春は血を吐きだして苦しんでいる。

「みなさん、楽しそうで羨ましいっすねえ」

花青は、その光景を楽しそうに見つめている各隊長を見回した。

「フッフ、春のもがき苦しむ姿はいつ見ても楽しいものですよ」

「おい、か、せい・・・てめえおせんだよ・・・殺すぞ」

息を荒げ、苦しみながらも春は悪態をつきながらも本気でクナイを投げてきた。花青はそれを軽く避ける。こんな事は日常茶飯事だ。師に解毒を貰いましたがー効くのかは知らないっすよ」

そういつて花青は、解毒といって渡された箱を俺に渡した。

「おーどれどれ」

俺は箱を開け中身を確認している。

「早くしないと本当に死ぬんじゃないか？」

薄はそう言ったが、楽しそうに見つめている。

「俺も見てたかったんっすけどねえ」

そう言つと花青は春に近づき身体を起こした。

そして偶が春の口に薬を放ると、水を流し込むと、ごくろ、と春は飲み込む。

「取り敢えず部屋にお連れするんで」

そついうと花青は春を抱きかかえた。

「後で春隊長に何かお礼を貰わないとっすねえ」

ため息交じりに呟く花青だが、笑をこらえている様にしか見えな
い。

「ちっ」

春は舌打ちをすると、ぐたりとした。意識を失つたようだ。

「それじゃ、皆様・・・あ、師から言伝なんっすけど」

・・・あの辻斬りは殺すな、と言つてましたよ。

その声を最後に花青は部屋を出て行った。

「あら、面白くなるかもしれませんね」

花青が去つた部屋で、闇が笑つた音がしていた。

柊家

辻斬りを春と花青が目撃した翌日の早朝である。

ここは、原派の大家家である柊家の屋敷だ。

藤派と対立する原派の中の四大大名の一つであり、柊家暗殺部隊を組織している。昔は一つの組織だったものが、今は有力な家がそれぞれを組織していた。

この柊家は最近内部の人間が変わり新たな組織へと強化している段階だ。

藤派との抗争が激しくなっているという事もあるのと同時に、行への対策でもある。が、それは間違っではないが正確な情報ではない。

「昨夜も出たそうじゃないか」
暗殺部隊総括、柊弾ひいらぎだんは自室に補佐である柊進之助ひいらぎしんのすけの前に座している。

弾は落ち着かない様子で愛用の扇子で膝を叩いていた。

「はい、昨夜殺されたのもあの件に関わっていた人間でした」

進之助は少しも表情を変えずに弾を見た。

「目星は付いているのか？」

弾は焦っている。次は自分だという事が薄々は分かっているのだ。進之助はあの件の後に柊家暗殺部隊の補佐になったが、犯人の目星も目的も把握している。

見えていないのはこの隊長だけだ。

「いえ、次に狙われるのが貴方であろうという予測は付いているのですが、犯人の目星は付いておりません」

昔は鋭い読みでこの柊家を守ってきたというが、大きく膨れすぎた男には現状すら見えていないようだ。

弾は、パチンと扇子で床を叩き、

「目星もついておらぬのか！優秀であるからこそ、お前を補佐に選んだというに・・・」

もうよい、下がれ！と弾は息を荒げ進之助に言い放つ。

「護衛は付けてありますゆえ・・・」

進之助は一礼すると、部屋から姿を消した。

そのまま進之助は、柊家当主の柊基西ひいらぎにしの元へ向かっていた。

当主との接触は総括の知らぬ所で行われている、情報が漏れる事は許されない。進之助は一度部隊編成の変更を終えると、風に紛れるように移動した。

当主の住む屋敷は総括の居る屋敷の隣になっていて、入るにも気を使わねばならぬのだ。上の者しか知らぬ入口へ到着した進之助は戸を二回叩いた。

奥には当主の気配しかないので確認している。

「入れ」

「は」

音も無く入り込み、膝まづいた。

「どうであるか」

基西はゆっくりと茶を啜っていた。眼差しは穏やかではあるが目の光は強く気を抜けば圧倒されてしまいそうになる。

「は、総括は何も読めていません、狙われるならばもう少し先の夜でしょう。最後の獲物ですので慎重に行動してくると思います。」

「さようか。お前の作戦に狂いは無いか？」

「ありませぬ。ただ、総括は行へ辻斬りに関しての依頼をしていたのは前に申し上げましたが、行はそれを受けなかったそうです」

「ふむ、奴らなら喜んで受けそうなのだな・・・」

「はい、真意は分からないのですが…何かしら介入してくる事もあ

るかと思っています」

「そうだな、今は藤派との関係も微妙な時期だ。藤が何か依頼をしているとも限らぬ」

「この戦力では行に立ち向かう事は出来すまい…その時の御覚悟は」

基西はゆつくりと煙管を手に取り、火を付けた。

「勿論出来ておる。お前はお前の仕事をしてくれればよい。しかし、もろく奴も耄碌したものだ…」

進之助はそれには答えずに、頭を下げた。

「それでは、これにて」

「部下の育成は任せたぞ」

「は」

進之助は入った所とは別の出口から出ていった。

「あ奴は察しが良いの…」

基西は吐きだした煙を楽しげに見つめ、

「出て来ても良いぞ」

中に向かつて話かけると同時に、一人の男が部屋に座っていた。

先ほど進之助が入って来た入口から入ってきたようだが、見えなかった。

「これはこれは、そちらから声を掛けて頂いて申し訳ありません」

男は金色の様な髪をしており、目には包帯が巻かれていた。口元は薄く笑っており、丁寧^{ていねい}に頭を下げる。

「御主は行の者か」

基西は、行の人間と逢うのは始めてであつたが、この部屋に易々と入って来れる人間は行の人間であろう。

「拷と申します。この度は楽しそうな仕事の依頼をしていただき、ありがとうございます」

男の目は隠され見えてはいないが、確実に目は合っていると感^{かん}じてしまう程の視線を向けて来ている。

「拷、か。用件はなんだね」

基西も動じる事なく、煙をまったくゆらせている。

「はい、この度の貴方様の依頼の報酬なのですが、一人女を頂きたく思います」

女、とはたぶん世間で噂されている辻斬りであろう。そして近い内に弾を殺しにやってくる。

「何故だね？」

基西は鋭い視線を拷に投げた。が、拷はするりとかわすように微笑んだ。

「私共の頭領が御所望です。それに貴方がたにとっても用済みになるでしょうし、今度起こる事件を藤派の仕業にしたて上げて欲しいという貴方のご要望にもお応えしたいと思います」

「女をやらぬと言ったら？」

「そうなれば、勝手に頂きに参りますが、その際の被害については予測がつきませぬ」

拷は、女を渡さぬなら柊家は跡形も無くなる、と言っているのだろう。しかし、

「それならば勝手に持って行けばよいではないか。この家が無くなるうともお主等には関わりはないであろう？」

行は原派でも藤派でもない。どちらの派閥の家が無くなるうとも、影響は無いはずだ。

「ふふふ、あの女を追う事を止めて貰うには丁度良い機会です。それに、柊家が無くなってしまうえば勢力争いが短くなってしまういそうですからね。私共の仕事を増やして頂かないと」

まだ長く争えという事か。行という組織の目的は未だに掴めぬ。組織の構成も殆ど分かっていない。が、この拷という男は隊長であるという事は耳に入っていた。なるほど、このような人間ばかりの組織となると今の柊では太刀打ちも出来ないであろう。

「わかった。持ってゆくが良い。こちらとしても仕事をしてくれるなら安いものだ」

「ありがとうございます。後の事は任せて下さい…では」

カッン、と煙管の灰を落とすと同時に拷は部屋から消えていた。
「なかなか難しいものだな…」

女と男

昼の世界は綺麗だ。人々は畑仕事に精を出したり、店の中で元気に動いていたり。明るい世界、輝いて見えていた。ずっと闇の中を彷徨う自分とは正反対である。

ずっと、憧れを抱いていた。あの時まで。

大切な人間を無くしてしまっただけからは昼も夜も闇がかかったように、はつきりしない。理不尽なんてこの世の中、いくらでもある。だけど、納得がいかない。あの人は死ぬべきではなかったのだ。

私が今やっている事。復讐、というのだろう。その復讐する術を自分は持っている。持っていなければまた違う生き方をしていたのだろうか。

昨日：四人目を殺しに行った夜。

誰かに見られた。見られた、見られてしまった。

幸いだと思うのは、見られた相手が普通の人間でない事だろうか。闇の匂いがした。何処の者かわからないが、ただ見て居ただけという事は、自分を追っている者ではないのだろうか。

ここで終わるわけにはいかない。

あと、一人。

もう少しなのだ。

橘清里は、たちばなぎより藤派の領地である街に身をひそめて居た。

此処であれば柊も易々とは入ってこれないだろう。今の柊は、藤派と緊張した関係なのだ。一本、糸が切れてしまうと大きな戦になるだろう。

それもこれも、あの柊弾が仕組んでいた藤派への襲撃失敗のせいだ。その責任を補佐であった、あの人に押し付けて自分だけ逃れたのだ。許せない。

それを実行した弾以外のものは片付け終わった。

後は、柊弾。ただ一人。

世間では無差別な辻斬りと言われているが、新しく補佐になった柊進之助は真相を見抜いているはずだ。しかし、執拗な追手は現れていない。あの男が気付いていない訳がないのに。

そこまで考えていて手を止めた。

今は家の中で刀の手入れをしていた所だった。最後の為に研ぎ澄ましておかなくてはならない。

しかし、家の中が変だ。思考に耽りすぎていたせいか、異変に気づくのが遅れた。何か…甘い香りがしてきている。香など焚いてはいないのに。

清里は懷に忍ばせてあるクナイに手を伸ばそうとした時だった。

身体が、動かなかったのだ。

やられた…！

「何奴？」

声だけは出せる。口は動かせるのか、しかし身体が動かなくては何もならない。

すると玄関から堂々と人が入ってきたのだ。

女、だった。女は自分の前に座り、正面から顔を合わせる形になった。

「初めまして、紅火と申します」
あかび

侵入者は丁寧^{ていねい}に頭を下げた。

「何処の者だ…」

柊の者…ではなさそうだが、一体…

「行、^{ぎょう}という組織を御存じですか？」

行。人とは思えぬ技を使う組織、原でも藤でもない…。そんな組織が私に何の様だというのか。

「ご存知ですね。用件としては、貴方の復讐劇が終わりましたら、行に入って頂きたいと思ひまして。勧誘ですね。」

清里は、最後の一人の首を取り、果てようと思っていたのだ。生きて帰れるなど思っていない。こんな時に勧誘だと良く言ったものだ。

それに、本当に行の人間なのかも分からない。信用は出来ないが…それにしても、

「何故ここが分かった…」

ここは誰にも知られる事がないと思っていた。街の中でも比較的人の多い飯屋である。病に良く効くという温泉があるこの街は、数か月だけ家を借り、療養していく人間が多い。人の出入りが激しい所であったが、自分が唯一得意と言える幻術を隙なく施してある。

周りから見れば、病に伏した自分には似ても似つかぬ女が療養に来ていするという風に見えるはずだし、共の者として別人の役も演じて居た。

見破れるとしたら、進之助くらいだと思っていたのだが…しかし此処が割れているのなら、急ぎ場所を移らねばならない。

「柊の人間は藤派の領地に簡単に近づくことは出来ませんし、行の人間以外はこの場所を知られてはいませんよ。まあ、情勢が変わらない限り安心でしょう」

紅火の言う事は、自分が考えていた事ではある。が、そう簡単に信用は出来ない。

それに、この自由の効かない身体…

「何をした」

清里は睨みつけ、低い声で言った。

「ああ、良い香でしょう？少しの間、身体が動きませんが…無用な切り合いにはなりたくなかったのですよ。ごめんなさいね」

しかし紅火は清里の威嚇など意に介さずと言った風に微笑んでいた。女から見ても美しいと思える顔だ。微笑みは妖艶な美しさを放っていて、少しの間その顔に見とれてしまっていたが、はっとして我にかえると、紅火は研いでいた刀を勝手に手にとっていた。

「それに、触るな！」

ぎり、と紅火を更に強く睨みつける清里。

「失礼。確かこれは貴方の大事なお人の形見でしたね。」

「知っているなら手を離せ」

紅火は聴いていないという風に、勝手に話を続ける。

「研ぎの腕もなかなか…しかしまだ甘い」

そんな事は分かっていた。だが今、刀を研師に出す事も出来ないのだ。人を切った刀とすぐに知れる。どこから情報が流れるか分からないのだ。

「これを美しく研いで来ましょう。貴方はそれで最後の首を落とすといい」

「何故…」

行が絡んでくるのか…。

「それは、貴方が必要だからですよ。近いうち、くの一部隊に欠員が出ます。そんな中、貴方を見つけてましてね」

だからといって何故、自分なのか。と、声を出したかったが声も出なくなっていた。

この香のせいだろう…このような技は見たこともなかった。打破策も浮かばない。

「何故。それは貴方は同じ匂いがするからですよ。血が、好きでしょう？苦しむ姿を見るのは楽しいでしょう？他人の命を自分が握る感覚、支配する感覚…貴方は此方側の人間だ。それにこの幻術はなかなかのモノです。貴方の復讐が済んだらそのまま来ていただきたい」

紅火は立ち上がり、置いてあった鞘に刀を納めると、玄関へ向かった。

そして振り返り、

「返事は復讐の済んだ時で良いですよ。刀は後日お返しに参ります。あ、ちなみに刀を研ぐのは腕のいい者なので安心して下さい。それまでの代わりと言っては何ですが、コレを置いて行きましょう」

紅火は玄関に、いつの間にか立てかけてあった袋を指差し、

「それでは、また」
と微笑み、出て行った。

紅火が出て行き、頭もぼうつとしてきたと思ったら、いつの間にか意識を失っていたらしい。

目が覚めると、身体は動く様になっていた。

刀は無くなっていたし、紅火が言っていた袋も玄関に立てかけてあった。中を見ると、見覚えのある短刀が入っていた。

「これは……」

あの人の持っていたものだ…抜くと、見事に研ぎ澄まされ妖しく光を放っている。

懐かしさに涙が零れてきた。

密会とは夜にするものだ、殊更、特に軍人は。

昼は軍人としての仕事があるし、人の眼に触れぬようにする為には夜が最適なのだ。

あの人はそう言っていた。

夜になると、街ごとに作られている門が閉ざされ他の街への移動は出来なくなる。

街単位での出入りは出来ないが、街の一部に花街が作られている所があり、そこだけは夜も賑わいを見せている。人が溢れ、華やかであるのだ。

ただ酒を飲む店もあれば、勿論女を買う所もある。それと見せかけての集会などは行いやすい。

軍人と言うものは、昼は軍の服で正装しているが、夜は着流しを

軽く着ているだけだ。

軍服を着ている時と着流しではぱつと見、人が違って見えるから花街に出かけるのには丁度いいのだと話している者も多い。

軍服は洋式のもので、帽子もある。

これは源家が支配する頃から変わりはしないが、藤と原の専属になると色が違っている。これは統一出来なかったのだ。

今はお飾りになっている、源家^{げんけ}直属の部隊は黒である。

藤は緑、原は茶色。

源家が統治している間、源歴と呼んでいたがそれも40年前までの事だ。今は帝国歴になっている。それも、反発しあっていたはずの藤と原が一気に源家を攻め落とした時に変わったのだ。

その時に源家は滅ぼされる事なく、ただ国の象徴として残される事になった。その際、両家は和睦を結んだのだが、因縁というのか、長きにわたり対立してきた彼らの血故か。

今また対立が激しくなってきた。

そんな中、原派である柊家の一部が勝手に藤派へと強襲をかけたのだ。

今までにも無かった事では無いが、その度にお互いに首謀者を相手側に渡したりと話し合いを設け、始末を付けてきていたし、この度も例外ではなかった。

それ故、辻斬りが出る事になったのだが。

それはそうと、紅火が清里を勧誘に行った日の夜である。

ここは、藤の領土である街、金来^{きんこがい}街。

隣にある鳥追山^{とりおいやま}で昔は金が採れていた。

金山で働く男達の為に作られた街である。街の名前の由来も、金^{きん}が来る街という意味だ。羽振りのいい男たちが住みついたり、通ったりしたのがこの場所だからだ。

その街で男が一人、店の中へ入って行く。

この男、小林明示こはやしめいじという。背は高く、短髪で涼しげな眼差しの青年だ。

小林家は藤派の中でも中流ではあるが、明示は一軍人としてそれなりの地位に昇っているようだった。

今は原からの強襲を受け、我慢ならなくなった若者達と組み、原への奇襲を計画していると言っていた。今日は計画の最終段階であり、奇襲の日にちを決めて来た帰りだという。

すぐに収まらぬ高揚した気持ちを納めようと、兼ねてから通っている自分の元へ出向いてきたと言った。

女を、椿という。艶やかな黒髪に色白な肌、優しげな瞳をしていて、程良く肉が付いており抱き心地の良い体つきでもあった。この店に来て日は浅いが、売りだし中の女だった。

椿は、明示が自分を気に入ってくれた理由を聞いたことがあった。そうすると明示は、少し照れたように、

「ふんわりと優しく包み込むような笑顔に一目で気に入ってしまったのだ」

と、言ってくれた。

それがたまらなく嬉しかった。

自分がただの遊女であれば良かったのに、と何度思っただろう。

ここは行の管理する遊郭、そんな情報が原派である自分の組織に入ったのは半年ほど前だった。自分は上の命令に従い、此処へ潜入していた。行への潜入はたやすいが、行のについて何かを掴めたといい情報は無い。帰って来た者が居ても、もうそれは人では無かった。

しかし上は、間者として行へ食い込め、という命を出した。

そんな任務の中に出逢ってしまったのが、明示だ。

明示に想いを募らせても、どうにも出来ないのだと分かっているし、忍が任務中に恋に落ちるなどあってはならない。

明示が実行しようとしてる柊家への襲撃も何度も止めたが、聞いてはくれなかった。自分は原派ではあるが柊の人間ではない。だが、柊家といえなかなかの者も居ると聞いていたし実際に目にした事もあった。特に、進之助は油断ならぬ人物であつたし、この情報も本当は伝えるべき事ではあつたが、行への潜入中であり、行へ入り込む事が最優先である。

柊家には悪いが、明示に生きて欲しいと願つてしまふ。

そこまで考えを募らせていたら、ふいに頬に優しいぬくもりを感じた。

「椿殿、いかがされた？何やらぼうつとしていたようだったが、疲れているのではないか？」

明示との情事の後には抱き合いながら横になり、話をしたりするのだ。

今も、いつものように隣に明示が居るのにも関わらず考えは止まなかった。

「疲れては居りません、ただ明示様にお逢いするのが久々だったもので幸せをかみしめておりました」

椿は、穂日に触れている明示の手に自分の手を重ねると、愛おしそうに相手の顔を見つめた。

「寂しい思いをさせてしまったのだな、悪かった」

明示は労わる様にそつと、椿の唇を吸った。

「今回は朝まで居る、だから私の隣でゆっくり休んで下され」

いつも涼しげな目をしているが、こうやって二人で抱き合っている時の明示の瞳は優しい。

「はい」

椿はこの時間だけは、本当の自分でいられる気がしていたし、自

分の思うまま生きたいと、初めて思った。

自分の世界は闇で、愛しい人の世界は眩し過ぎるのだと分かっ
いても止まらない想いあるのだ。

椿は明示に髪をなでられながら、忍である自分を忘れたかの様に
眠りに付いた。

死体に恋した憐れなけもの

闇夜に月が一つ、浮かんでいる。

行の屋敷、庭に小さな池があり、そこに月が写っている。

その池の前に一人、立っている。池に浮かぶ月を楽しげに見つめる影は、煙管の煙を吐き出していた。

「良い夜だ」

「そうですねえ。こんな日は血に染まりたくなっても仕方ないですよ」

声と共に増えた影は、池の周りにいくつか置いてある石の一つに腰かけていた。立っている男の後ろである。

「お帰り、拷」

「師はのんきですねえ。先ほど貴方の為に血に塗れて来たっていうのに」

立っている影は行の頭領である師だった。

その足元に拷が持っていたモノを放り投げると、ぐちゃり、と音がした。

「それに見覚えは？服装は源家の裏の部隊のモノでしたよ」

「ほう……」

「特に探られた形跡はありませんが、私達の敷地内に入ったのでね」「面倒を掛けるなあ」

そういつて投げられたモノを拾うと、それは人間の頭部だった。

目玉は片方抜かれ口元は裂けに裂けていた。

「そうでもありませんよ。春が楽しそうでしたからね」

「くくくつ。たぶんこれは源家じゃないな。あそこは行に干渉する事は無い。原か藤か」

そういつて頭部を池に放った。

ばしゃり、と音がすると、水面が揺れ赤く染まっていた。

「そうですか…調べますか？」

「いや、必要ないよ。それより今度の準備はどうか？」

「それはもう、滞りなく。つまらない程です。あ、一つ面白いのは椿が淡い恋心を寄せてる人間が居るようですよ。それが小林明示だと聞いて、面白くて♪」

「ほう…それは面白いな」

表情は見えないが、楽しそうな声色だった。

師は吸い終わった灰を落とすと、くるりと振り帰ると拷に歩み寄った。

「まあそれと辻斬りちゃんは、落ちますね。紅火が上手い事やってきましたよ。今は辻斬りちゃんの刀を研ぎに出してます」

「柊の方は」

「基西の方は大丈夫でしょう。あの男と次に総括になる進之助はなかなか使えると思いますよ。とくに進之助は今後、刃を交える事があるでしょうから…楽しみで仕方ありません♪」

「いつも御苦労」

そういつて師は拷の頭を撫でた。

「私ももう結構な大人なのですがね…」

ひとしきり撫でると、

「俺は寝る」

と言つて、部屋に帰って行こうとした師を拷が呼びとめた。

「今日はどちらにお出かけで？」

「今日は墓参りにね」

「それで。ではおやすみなさい」

何か納得したという風に拷は頷き、月を見上げた。

師の姿は闇に溶け、無くなっていた。

「意外に感傷深いものですねえ…」

拷が師に逢いに行く前の出来事だった。

行の屋敷はいくつかあり、本拠地ではなく拠点といった所での事だった。

柊弾の命で、辻斬り搜索をしている部隊があるという事が分かり、それを消しに拷の部隊と春の部隊が動かされた。

二つも部隊は必要無かったが、少し暇していたので二つの部隊が出されたのだった。

その時、近くの拠点で見なれない人間を見つけたので春をそのまま置いて来たのだった。

弾の送った部隊も片付き、拷は後始末を任せて先に拠点に移動したのだった。

暗い部屋の中、人の動く気配がしている。春だった。

血が部屋をあちこちに飛び、模様を描いている。

「違う……」

小さく呟きながら、まだ生温かい腹の中に手を突っ込み、腸を引きずりだし手でちぎっている。

ぶちり、ぶちり、ぶちり。

静寂の中に響く。

「違う……」

ごりっ、ぐちゃり、ぐちゃり、べとり。

肋骨が開かれる音がする、臓物が収納された身体から乱暴に取りだされる。

その光景を、胴から離された首が見ている。自分の身体が壊されているのを、光の無い瞳で、ただ静かに。

その切り離された頭部に手が伸びてきた。

光の無い目玉に指が這い、ぐちゃりと指先が侵入し、そして掴むと、

ソレを取りだす。

力の加減を間違えたのか、ぶちゅつと音が響き、目玉が潰れた。ねとり、としたものが指に絡みついてくる。

「ちっ」

そのままの状態で取り出したかったのか、舌打ちが聞こえた。潰してしまった目玉を無造作に放る。

違う……

それを少しの間眺めていたが、興味を失ったのか近くにあった別の頭部を掴み、壁に投げつけた。

ごとり。壁に当たり床に落ちた。

その横に背の高い影が一つ、現れたと見えたら、頭部が音をたてて潰れた。

「拷……何か用？」

頭部を潰したのは、背の高い男…拷だった。

「仕事もしないで、こんな所で死体遊びですか」

「仕事ならしたさ、こいつら侵入したからね、ここに」

そう言って、持っていた頭部を拷に投げた。

それを受け取り、袋を取り出すと袋に入れた。

「美しくないですねえ」

春は立ち上がると、先ほどまで滅茶苦茶にしていた死体を、他の死体が摘まれている所へ蹴飛ばした。

他の死体も同じ様に滅茶苦茶になっており、何人分なのかよく分からないあり様だった。それを横目で見ると、春は口を開いた。

「恋、って言葉を教えて貰った事がある」

床に突き刺してあった刀を引き抜くと、血を拭った。

「心臓が、ドクリと音を立てる、そしてその人間の事ばかりを考えてしまう」

そしてその刀を大切そうに、背中にある鞘に納めた。

「そんな感じだっけ聞いた」

「まあ、間違っただけじゃないと思いますが」

拷は、袋に入れた頭部を腰に下げると、春を眺めた。

「こいつも、違った。あの人とは違った」

「そうですか。残念でしたね」

春が外へ歩き出したので、拷は口笛を吹いた。部下にここの掃除をさせなくてはならない。春の気が済んだという合図でもあった。

「仕事、終わっただろう？」

春が障子を開けると、淡い月の光が差し込んできた。

「ええ、帰りますよ」

春はそのまま月を見上げていた。

「そう、いつでも思い浮かぶのはあの人の死体。美しい、あの人の。」

「それなら・・・俺は死体に、恋をしたんだよなやっぱり」

春は一言残し、そのまま部屋から出て行った。

拷は、その恋した死体を思い浮かべているのだろう。春の後ろ姿を見送った。

「難儀なモノですねえ。」

柊進之助

柊進之助は、弾に呼ばれて屋敷へ訪れていた。部屋で待てと言われてから二刻程が経っていたがまだ現れない。

来客と言っではいたが、違っだろう。ただ自分を待たせたいだけだ。どうでもいい弾の自尊心など粉々にしてやりたいものだ。

今回も辻斬りに付いて呼ばれていたが、特に報告する事など無い。しかし…この件は、当主の基西にも知られずに始末を付けようと思っっていたのだ。だが基西にも感づかれ行への依頼も通っっているようだった。

基西はこの件で、行の情報を得るという事と繋ぎを付けていようという事だろう。

そうだった今、あの女は不要だ。始末を付けさせようと弾の命という事で秘かに人を放っっていたが誰も戻らなかった。あの女一人の仕業では無いだろう。行があん女にも絡んでいるかもしれない、だが…行の目的は何か。

あの女…そう、清里は自分の思う通りに動いてくれている。最終的に弾を殺しに来る。

基西から、襲撃は四月十六日だという情報が入って来た。藤派の襲撃も同じ日であり、清里も同じ日に来るという。

何の意味があるのか。いや、藤派の襲撃により弾が死ぬという筋書きなのだろうが、清里はどういった役割を果たすのか…

行からの情報が基西に行ったものだと思えるのが自然だが、何故…清里に付いての情報まで。

行という組織について分かっている事はほとんどない。あと三日後…行の情報を収集する為に人員の配置を変えなければならない、

か。

と、進之助が考えを巡らせていた、その時である。

ふいに殺気を感じ、素早くその場から離れたと同時に天井から人が舞い降りたかと思うと、ぐさり、と畳に刀が刺さった。

進之助は忍ばせていた短刀を取りだす動きの流れで、降りて来た人間の首を落とした。血飛沫を避けるように後ろに下がると、部屋は血で彩られた。

次に隣から襖を抜けクナイがいくつか飛んできたが、それもかわすと短刀をふわりと放った。手から放たれたと見えた瞬間には、襖も通り抜け、隣の部屋から人の倒れる音が聞こえていた。

気配はもう一つあったが、進之助は何もなかった。

ひとつ息を吐いた。すると襖がすいっと開いたと思うと、現れたのは弾だった。

すつと跪く進之助。

「捕える間もなく討ってしまいました、申し訳ありません」

弾の仕向けた者だろうが、問いただしはしない。この程度で自分が討てると思っていたのなら、笑止といえるだろう。

弾は飄々と言つてのける進之助の姿を見て、顔が赤くなる程に憤慨した表情を見せると、

「今日はもう帰ってよい」

そう言い放ち、去って行った。

進之助は血で彩られた部屋を見渡すと、部下を呼びつけた。

「片付ける」

「補佐は…」

「私は出掛ける」

「は」

進之助は部屋から出ると、姿を消した。

進之助が姿を消した後、弾は部屋で部下を怒鳴りつけていた。

「あの様は何だ！出来る人間を向かわせろと言ったではないか！」

一人、無言で跪いている人間に持っていた扇子を投げつける。

「追え」

「は」

跪いていた人間が部屋から消えると、弾は怒りで乱れた呼吸を整え始めた。

「あの男…馬鹿にしおって」

自分の仕業と気付いているだろうに、平然としていた進之助に怒りを隠せない。

部下も部下だが、自分が候補に選んだ男だ、あの程度で討たれるはずがないと思わなかった自分にも腹が立った。優秀過ぎるのだ。自分より優秀な人間は入らないのだ。

早々に始末を付けたい。自分を始末しに来る事は無いだろうが、念のため、他の者達に警備の強化をさせなければならぬだろう。この屋敷に居る者達は自分に付いてくる人間のみだ、屋敷に居るならば安全なのだ。

今、巷を騒がせている辻斬りに関してもここに居る限り安全だ。

辻斬りに関しては確かに面倒な事であったが、今後の障害となるだろう進之助の処理を考える事にした。

進之助を不審に思い始めたのは辻斬りが出始めた時だった。

何か関係しているかもしれないと探らせていたが何も出て来ない。しかし長年の感が進之助へ危険信号を発しているのだ。

このような内輪の事、当主の基西に言うまでも無いし、知られる前に片付けなければ。

弾は深くため息をついた。

屋敷で襲撃された後、進之助は柵の忍が使う小さな家の一室に居

た。弾に進之助を追う様に命じられていた男と一緒にだ。

「お前、俺に何も言わなかったな」

「あの程度で死ぬ人ではないでしょう」

先ほどの襲撃の事を話している様だった。

進之助と話をしてる男、紺《こん》という青年である。大柄で厳しい顔つきをしており常に無表情である。

「だからってな…まあいいお前はなかなか信頼されている様だしな」
「貴方に育てて貰った様なものですので、これくらいは」

紺は自分が拾ってきた孤児だった。道に転がっていたのを連れてきて仕込んだ。年は変わらない様だったが、拾った頃はろくに食ってなかったようで、身体は小さく頼りなかったのだが、今では自分より大きくなっていた。

「お前が優秀で助かってるよ」

進之助は壁に背を預け、だらりとしながら話していた。あまり人前では見せない姿だったが、紺にとってはこれが普通だった。

「しかし、馬鹿な事を…まあ俺は姿を消しておこう。襲撃は三日後だ、手はず通りだが…」

「は」

「行が関与してくるだろうから、その動向に数人配置させて欲しい」
「わかりました」

紺は変わらず無表情だ。だがたまに笑う事もある。一年に一回くらいだが。

進之助は、ふっと笑うと、

「行け」

と、紺に命じた。

「は」

紺は頭を下げると部屋から姿を消した。

それを見送ると、進之助はごろりと寝ころんだ。

「やる事が無くなったな…まあゆっくりするか」

紺は信用出来るし腕も立つ。弾へ取り入れさせたのも自分だった。

あいつに任せておけば問題もない。
進之助はゆっくり瞼を閉じた。

想えば

あの人と出会ったのは、新しく配属が決まった部隊に入った時だった。

自分の幻術も認められ、事後処理をしていた頃とは反対に、暗殺実行の部隊である。部隊と言っても、大きく区切られているだけである。実行するのは仕事に応じて人を選んでいた。

そもそもこういった各家の裏部隊というのは、源家がまだ支配していた時代、相模《さがみ》という一つの組織だった。

しかし、源家がただの飾りとなった時からそれらは自然と各家が管理し始めていったのだ。

相模の柵隊、そういった呼び名もある。が、今となってはあまり使われていない。

今後、藤派と本格的な対立になった場合には召集がかかり、相模としての仕事になっていく事もあるのかもしれない。しかし容易な事ではないだろう。

軍だけは変わらずに原派の軍、として組織されている。

それは藤派も変わりが無いようだった。

清里は部屋で愛用の道具を点検していた。

紅火に刀を持ち去られてから、張り詰め過ぎていた緊張の糸が解れたように感じていて、今は程良い緊張感を保っている。

あの件に関与していた者を斬っていた頃は、復讐心に心を支配され過ぎていたのか身が引きちぎれそうだと感じる程に心が痛かった。今も復讐の心は変わりはないが、落ち着いているし、あの時程に苦痛な日々ではなかった。

紅火が刀を持ち去った日は、不安と焦りもあつたのだが、一日も経つと薄れていったのだった。

清里は、ふと目に止まった書を手に取ると愛おしげに指で表紙をなぞった。

これはあの人が自分用にと書きためてくれたものだ。自分は暗器を扱う事が苦手だったのだが、これにはそれらの使い方などが書いてあつた。

あの人の文字である。勿論、実際に訓練もした。自分が使わなくとも武器を知る事は大事であるからだ。敵が使用している武器は分かっていた方が対処も出来るというものだ。

自分より任務の数も質も格段に違っていたはずなのに、訓練にも付きあつてくれた。

そう。あの人は人を育てたがつていた。

今の柊では太刀打ち出来ぬ組織があると。そしてこれから藤派との抗争は激しくなる一方だと考えていたようだった。

原が滅びようと柊は続かせなければいけないと。

柊家当主、柊基酉という人物は治めている領土の民にも慕われているし、素晴らしいお方だ。あの人の血を絶えさせてはならない。そう言っていた。

自分は柊の忍に拾われ育てられた。

親に捨てられ森の中を彷徨っていた所を拾われたのだ。

幼い頃から幻術が少し使えたが、それが親にも周りにも気味悪がられたのだ。

拾ってくれた人間はもうこの世には居ない。柊に尽くせと言われながら育つたのだが、心からそう思える事は無かった。

だからあの人が基酉の為、柊の為にという事も理解は出来なかった。

ただ、柊に尽くさずとも俺に尽くしてみないか、とあの人に言われた時には心が躍った。

この人の為ならば、と思えたのだ。育ての親が死に自分は誰の為

に生きればいいのか分からなくなってもいた。
それをあの人は見抜いていたのだろうか。

清里が、想い出に浸りながらも作業を続けようと書を置いた時だった。

「一休み、しませんか？」

数日前に聴いた声が後ろから聞こえて来た。

昼の森の中である。

木々に阻まれて光もまばらにしか届かない。そんな所にぼつりと寺が建っている。

もう誰も訪れないような古い荒れ寺だ。

その中から長い時間、女のあえぎ声が漏れてきていた。

布の摺れる音、床がきしむ音。

中には二人、居た。

男が女に覆いかぶさっている。

男の動きに合わせて、女も腰を動かしていた。

女の着物は殆ど脱げていて、白い手足が男にねっとり絡みついて別の生き物のようだ。

「あつ、めい、じ…さ、ま…ああつ」

男と女混じり合っている音に合わせて、揺れる。

男は女の耳元で何かを囁いているようだった。

「あつああ…、あああ…貴方の、思うままに…っ」

何度目の交合だろうか、女の瞳は朦朧としていて焦点が定まっていないように見える。

女の男の背中に回している手に力が入り、ぎり、と男の背に爪痕を残した。

「愛しておりますよ、椿」

そう囁くと女は恍惚とした表情で頷いた。

そして、男が果てると同時に女は気を失ったようで、ぐったりと床に横たわった。

男は、小林明示。そして、女は椿だった。

明示は身支度を軽く整えると、部屋の窓を開けた。

するとそこには綺麗な桜が満開で、風にと共に花びらが舞っている。

少しの間それを見つめていた明示だったが、倒れている椿の元へ歩むと、椿の顔をそっと撫で、

「お前と逢うのはこれが最後であろうなあ」

そう言っ椿の身体を綺麗に拭くと、用意していた真っ白な着物を着せた。

「私からの最後の贈り物だ：美しく染めておくれよ」

そして、傍に置いてあった刀に手を掛けた。

奇襲まであと二日、という日だった。

幕上げはいつだったのか

雨が降っている。

しとしと、しとしと。

雲が月を隠し、闇が世界を支配していた。

「いざ、天誅を下さん」

男たちが数十名、勢いよく一軒の屋敷へ突撃していった。
門を破り中へ。

それに、警護の人間が応戦している。

その光景を眺めている人間が居た。

暗闇に紛れてはいるが堂々と門の上に立っている。

清里だった。

突入した者達も応戦している者も、清里の存在には全く気付いていないようだった。

清里は、少しだけ眺めると、すうっと、姿を消した。

「来たか」

その清里の姿を認め呟いたのは、柊進之助だった。

ここは弾の屋敷である。

今し方、藤の者どもが突入してきたが、そちらには見向きもせず
に清里を見つめていたのだった。

庭にある木の上に座って眺めていた進之助だったが、ふいに滲ん
できた気配に身構えた。

「そう警戒しなくなっている、今は敵じゃないからな」

そう言っ姿を現したのは、大きな鎌を二つ持った体中傷だらけ
の男だった。

髪は短髪で、額から目を通り口元までの大きな傷が目についた。

形相こそ強面だが、目つきと声色が優しげだ。

「お前は…」

「行の薄という。お前が柵進之助だろう。俺はこの面白そうな祭りをちよつと見物に來ただけだ」

そう言うつと、木の幹に背を預けて下を見た。

薄と名乗った男が立っているのは、軽い人間や子供なら問題は無いだろうという程度の枝だ。

だが立っているのは、男。

体格のいい男を支えられる程はないだろう、太さだ。

しかし、薄は平然と立っている。

「見物、と。じゃあ参加はしないのか」

進之助は、懷に伸ばした手を引くと警戒を解いた。

自分と薄との力の差を考えると、警戒していようがしていまいが、襲われた後の結果は同じだと思ったからだ。

死ぬ時、それが自分の寿命だろう。

「ほう」

薄は、それを見て目を細め進之助を見た。

「参加はしない」

それだけ言うつと、下の景色に視線を写した。

下では、今繰り広げられた静かな空気とは反対に刀のぶつかり合う音、人の肉が裂かれる音。倒れて行く者、悲鳴。

それらが重なり合っていた。

しかし、疑問がある。

弾の屋敷なのにも関わらず、忍びが出て来ていない。

それに、弾の屋敷を警護している者達の弱さときたら何だろうか。侵入者に良いように斬られている。

それを進之助はただ見ているだけだ。

すると、突然侵入者達の数名が一斉に地面に倒れ込みもがき始めたのだ。

「な、何だっ?!」

「おい、どうした?!」

倒れた仲間を抱きかかえたが処置する術も無く、見ていただけしか出来ない様だった。

そして倒れて行った者は痙攣し、口から泡血の混じった泡を吐き、絶命した。

何が起ったのか分からない状況で、微かに慌てはじめていた。そんな中、突然姿を現した男がいた。

長い、棒を持っている。両の端は鋭く針の長いモノのようだ。倒れた男達を悠々と眺めている。

「あれは、俣という」

薄が静かな声で言った。

進之助は驚いた。敵になるかも知れない人間に自分の仲間の情報を教える事があるのか、と。

「なんかーイマイチ。毒が強すぎたのかこいつらが弱いのか。すぐ死んじやったね」

くすくすと笑っている俣に、他の侵入者が襲いかかる。

刀が俣に届く、と思った瞬間、男の身体は二つに割れた。

血が吹きだし地面に、どう、と落ちた。

男の倒れた後に、顔を半分以上隠した男が血を浴び立っている。

薄とは形は違うが、大きな鎌の様なものを二つ持っている。

一つは背負っており、一つは手に持っている。今、男を割ったようだが血は付いていない。

「な、何者だ貴様ら」

侵入者達は後ろに引いている。

警護の者達も啞然としていた。

「何者って、君らの方が何者? 屋敷に侵入してきてさくすくす笑いながら、」

「私達は柵へ裁きを下しに来たのだ、邪魔立てするならお前たちも斬る」

恐怖からなのか、武者震いなのか男は震えながら言った。

「なんだと、何故お前らに裁かれなければならぬ！お前ら、藤の者か…」

生き残っている数名の警護の者が言った。

「だ、黙れ、薄汚い血をここで絶やしてくれる」

「な、なんだと…許せぬ！」

そして、お互いが走りだした。

二人の刃が交わるかと思ったが、二人はそのまま地面に倒れた。

二人の首には、細い針が刺さっている。

「僂、柎は殺さなくていいのではなかったか」

「あーつつい」

そんな会話が聞こえてきた。

そう、僂が毒針を放ったのだった。

進之助は啞然としていた。

行の人間の實力を初めてみたが、これは人間なのか。

僂が針を放つ所も、もう一人の男の動きも殆ど見えなかった。

それどころか、あの武器に血が付いていないのだ。斬ったと思ったのに、違ったのか…？

進之助は、背筋が凍るといふのはこういう事なのか、とも思った。

「あれは、泉」

薄がまた、呟いた。

「仲間でも無い人間に情報を漏らしていいのか？」

「ただの呼び名だ、たいして意味もない情報だろう」

「行の情報は殆ど入って来ない。名や姿が一致する情報は貴重だ。そっちが漏らさぬ様にしてるのではないのか？」

「違うな。行は特に何もしてない。隠したがる人間も居るが…どちらかと言えば戦闘を好む。厄介事は大歓迎だ」

薄は楽しいのか、薄笑いを浮かべている。

その姿、その存在に進之助は恐怖した。

その厄介事が起こる様な機会が無いのだろう。即ち関わったものは情報を伝える前に死んでいるという事だ。

分かつてはいたつもりだが、情報を漏らさぬようにしているの、していないのに情報が無いのとは違いが大きい。

これから先、行との戦闘は避けられない時が来るだろう。

その時、太刀打ち出来るのだろうか…

進之助は、はっと我に返った。任務中にこんな事は初めてだった。これからがまた、面白いぞ」

薄が言った。

進之助はその言葉に誘導されるように、意識を下に向けた。

藤の者、柊の者。

どちらも凍りついている時だった。

「小林様！」

後の方から、一人の血まみれの男が歩いて来たのだ。

それに気付いた一人が名を呼んだ。

「別動隊は、どうなったのですか？」

一人の男が小林と呼ばれた男に近づいた。

「ああ、全滅でしたよ」

さりと小林は言った。

「全滅…」

「そう、俺が全滅させてきたんです。次は貴方の番ですね」

そういつて爽やかな笑顔で、近づいて来た男…仲間であろう男を斬った。

「な、何をされるのですか!？」

他の男が言った。

「血迷ったか、明示」

そう、男は小林明示だった。

「血迷ってるのは貴方がただと思いますけどね」

「このっ、裏切り者」

残っていた数名の男達が小林に襲いかかる。
と、

「あれ、俺達は無視？嫌だねー」

傭はそう言くと、立っていた場所から跳躍すると、一人の男の後に着地した。

そして、持っていた棒の様な武器で後ろから男の頭を貫いた。
男の額から棒の先端が付き出ている。

「あつれっ…？」

貫かれた男は、訳も分からぬ表情で痙攣し、放尿ながら果てた。
傭は足で男の背を蹴ると、棒を引き抜いた。

数名、それに気付いた者は足を止め、気付かぬ者は明示に近づいていく。

足を止めた者達は、傭を見ている内に斬られたのだろう。

傭に貫かれた男が倒れた時、他も地面に二つになって落ちていった。

そして、明示に斬りかかっていった者達も次々と斬られていく。
あつと言つ間に庭は血の池になった。

少し前まで人であったものが、今はただの肉塊として落ちている。
それを見ていた柊の人間は、恐怖に足が竦んでで居るようだった。

地獄か、と思うほどの光景だ。

「うわああああ！？」

柊の警護の者達は我に帰り、逃げようと刀も捨て後を向いた。
その瞬間、クナイが飛んで来た。そして皆、倒れた。

「ほう、なかなかやるな」
薄が言った。

進之助が放ったものだったのだ。

「殺して良かったのか…」

泉がその光景を見ると少し残念そうに言う。

「あー良かった。ってか先に言っただけ良かったねー実験したい毒ま
だあったのに」

僕は懐から布を取りだすと、先ほど使った棒の先端を拭いている。

「これで俺達の仕事は終わりか…」

「そうですね、もの足りないと思いますが。お疲れ様です」

そういつて近づいて来たのは、先ほど藤を裏切った小林明示だっ
た。

「黄郎丸、お前だけ良い役だったじゃん」

僕が明示に向けて放ったのは違う名だった。

「自分の好きな殺し方は出来なかったですけれどね」

そう言っ、血に塗れている姿にも関わらず爽やかに笑っていた。

「あれは俺の部下である、黄郎丸だ」

そう薄は言っ、進之助に向けて笑った。

進之助は声も出せずに薄を見つめるだけしか出来なかった。

何故か。

それは、小林明示という人物を筆頭にこの奇襲は計画されている
とだけ聞いていたからだ。

「早く、女の所へ行くと良い。見ものだぞ…そろそろ弾の管理下の
忍びの殲滅も終わっているだろう」

それだけ言っ、下の三人の元へ降り立って行っ。

進之助は一瞬、迷ったようだがすぐに弾の元へと駆け去った。

それを三人は見送ると、

「見るだけって楽しいのかよ」

僕が薄に向かって言っ。

「話し相手が居たからな、退屈ではなかった」

「隊長の事だから、皆さんの事をちゃんと紹介してそうですね」

黄郎丸がくすくすと笑っ言っ。

「だろうな…」

「まあ隠す事じゃないし、追手とか差し向けてくれると面白いよね」
三人は顔を見合わせ、笑った。

「さて、俺達も見物に行くか」
薄がそう言くと、三人は一斉にその場から消えた。

気付けば、雨は止んでいた。

見ているだけで、存在するだけで圧倒してくる。

そんな人間に逢った事は無かった。

進之助は、急ぎ弾の元へ走った。

距離は短いが、長く感じられる。

恐怖を振り払うように、住み慣れたはずの闇に呑みこまれないように。

藤も、弾に付いている柊の人間も全滅というのは筋書きと通りだった。

しかし内容は、想像もしていないほどの惨状で幕を閉じた。

事の結果は筋書き通りになるはずだが、進之助にも柊の裏部隊にはとてつもない影響が及ぶだろう。

雨の匂いと血の匂いが混ざっている。

地獄の匂いとは、この様な匂いなのかもしれない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2726v/>

行 - g y o

2011年9月18日03時15分発行